

平成二十七年八月一日発行 第二十五卷第八号 通巻第二九〇号 (毎月一回一日発行)
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

平成27年8月号

槐

かい

岡井省二創刊



王朝の光

高橋将夫

柿の花一寸法師の帽子にす
交番に光源氏の落し文
舌頭にごろがす一句涼しくて
何時見てもあやめは雨を待つてをり

風炉手前どこにも無理がなかりけり
仮の世の仮にはあらず原爆忌
武者人形剣を絵筆に持ち換へる
重さうな黒髪茅花流しかな
クラインの壺にも黴がきてをりぬ
王朝の光を今に若楓
今生を見尽くして虹消えにけり



槐賞受賞作品二十句

岩下芳子

未黒野や大地ゆつくり育ちたる
湖の懐に入る雪解川
この道は抜けられませんか日脚伸ぶ
山腹に声を上げたる山法師
男の子はやをとこの匂ひ初節句
甘いもん大好きという目白の目
葛城の山の昂り躑躅燃ゆ
宵山の動かぬ銚を見てまはる
萍を分けて神話の国覗く
病草紙の男腹這ふ土用灸
まんまるの摂津秋茄子おほほほ
ケーキ屋の裏口で焼く秋刀魚かな
栗の虫この世の光まぶしかり
風神の袋に詰めし落葉かな
裸木となり骨格のあらはるる
IQはさほどでもなし鵄猛る
甘からむ八手の花に群がりぬ
冬日向青きパインの熟れはじめ
風花の舞ひ上りたる鷹ヶ峰
こんな日のこんな時には卵酒

槐安集

水野恒彦

憑^よ代^{しろ}の樹の鎮座して夏来る
昼はまた昼の寂しさ燕子花
麦の黒穂抜けば広がりゆく暮色
花は葉に晩年少し日の当り
箱庭や旅立つときの我がをり

加藤みき

精霊の漂うてをり夏の月
海青し天保山へ登りたる
草いきれ匍匐訓練今もある
祭神は鎌足公なり青嵐
蛞蝓のしろがねの道輝けり

中島陽華

花魁は八の字歩き立夏かな
かくし味狐火わつと大舞台
海老蔵の睨みと鳴海浴衣かな
京のじやこかけてぶぶ漬五月晴
マントラを誦んじあがり鯨かな

竹内悦子

岡井省二句集
幾たびも夏鶯が啼きに来る
坂道は熊野みちなり著莪の花
庭下駄の散らばつてをり河鹿鳴く
竹皮を脱ぎ竹の皮持ち去られ
鮎茶屋の二百の鯉の連なりて



雨村敏子

高野口にさしかかりたりあまどころ
優曇華や陀羅尼陀羅尼と歩きける
亀の子の泳ぎ切つたる普賢かな
ふつきつたつもりの石童子また出合ふ
つはぶきの青山の日のひとところ

本多俊子

風蘭の香やふと我に返る
次の世の声かと思ふ青葉潮
黒揚羽まひあらはるる法の庭
晩学や夏暁の坂歩きをり
麦秋や宇宙の果と思ひをり

近藤喜子

振花や正面のなき親しさよ
蝸牛ゆつくり前に前にかな
蝙蝠のぶら下げてゐる昼の貌
身に遠く風の過ぎゆく麦の秋
紫陽花の眠たさうなる日差しかな

瀬川公馨

みさうらふの増ゆるばかりや木下闇
立とせる富士の懐げんげんよ
マンゴの妖婆の肝でありしなり
薪能の極夜を迎へゐたりけり
船蟲のカピタンの列眺めたる

久保東海司

勢揃ひして鬨あげる葱坊主
ゆすらうめ情はもつれ易きかな
寡婦として生きし歳月わらび狩
風と来て風と去りゆく水すまし
行く雲の果の近江の麦青む

柳川 晋

管弦おかげんさい祭さい 白しろい御飯まんなまに魚いさな買かうて
牛は身を飾りさんばい降ふりしかな
卯の花腐くし今日こんにちは荏胡麻さんばい降しの葉はのキムチ
八重垣やえがきの迷路めいろに潜ひそむ大蛇おろちかな
胸底むねぞこにいつも誰たれかが浮ういてこい

熊川 暁子

まつさらな明日へ昨日を捨つる花
酢を利かせ飯粒立す立夏かな
万緑を先づ差配せり葉桜は
田水張り空千枚を沈めけり
本当ははだかで居たい蝸牛

寺田 すす子

白雲の通り道なり樟若葉
女人高野石楠花の白さかな
星星の遊び場となる梨の花
翻車魚の殊に若葉の眩しかり
菜殻火や暮色のなかに烟立つ

岩下芳子

でこぼこにリュック膨らむ夏蜜柑
七三に構へ寄り来る雀の子
汀走る跣の五指を全開す
疵つけて又疵つけて漆掻く
八角の屋根の日月夏館

近藤紀子

柿若葉日に日に天を狭めたり
春昼や犬だけが聞く音のある
燕低く飛ぶ日和なり物集女道
小塩山の筍流しを浴びてゐし
白子茹づ衣通姫の肌かな

岩月優美子

雌蛭木の先は五月の波の音
ぼうたんに影差し可あたらよ惜夜となれり
夏蝶や雨後の魂日に晒す
マリアとも摩耶とも白き百合の花
摩天楼目指し子燕飛び立てり

竹中一花

万緑の揺るる光を背に乗する
衿元を直してをるや藤の風
黄雀風塔の十字架海を向く
軒先に伏見欣浄寺雫を残し白雨止む
ほころびの夏衣黒き丈六佛

槐市集

有松洋子

青芝に寝転び大空へ飛び込む
「飛ばうよ」と五月の鷗誘ひ来る
薔薇ひらく傷つけること怖れつつ
風あをく染まるや若葉吹きすぎて
羅針儀は星にまかせて夏の航

犬塚李里子

前の世の闇を抜け来し夏の蝶
言霊に支へられ来し夏木立
十字架は雲の向かふに新樹光
目纏ひや操るもののあるやうに
夜は星の滴り受けて妖しかり

井上静子

夏の日ほ畑の水やりから始む
幼な子の靴のふはふは山桜桃
何時にても忘れ上手や杜若
豆飯をはや帰る娘に持たせたる
雨つづく花大根の空仰ぐ

今井充子

缶ビールシユワツシユワツと弾けたる
カーテンの幽かそけき音や夏きざす
このひとと二人三脚夏帽子
夏初めななめの日差し西ノ京
米国からのハナミズキ寄贈百周年
百年目の切手になりし花水木



江島照美

山藤は幹をくねらせ上りけり
浮世絵の年増の笑ひ振り花
藤の雨恋の涙と思ひけり
夏祭駄菓子に釣られ山車を引く
落し文を見つけちやつたよかくれんぼ

岡田桃子

菜の花の空に展がる日本アルプス
山姥の里の空覆ふ鯉幟
田水張り日本アルプス足元に
木食の空腹いかに歩き遍路
木食の塔は立夏のデコレーションケーキ

久保夢女

蛇の衣からり乾いてをりにけり
遠い日の記憶に甘しさくらんぼ
老犬の歩み促す風五月
梅漬ける今も女の一大事
山みどり真つ向勝負挑みけり

後藤マツエ

花の闇老ひも若きも艶めきて
うららかや見知らぬ人を輪に加へ
囀りや幼もすでに鳥ことば
子どもらが風となりゆく五月かな
天網を避けて揚げるや鯉のぼり

阪倉孝子

一言は薔薇の風ほどまぶしかり
扁額の文字の余白や若葉光
島太鼓胸に響みし青葉潮
フリルつけ出目金となり人界へ
薔薇湯入る気楽さにあり万媚かな

吉田順子

森の樹々白々と咲き夏来る
朴散華地にかへりつつ香は消えず
海光のふくらんでくる夏はじめ
桐の花故山いよいよ遥かなる
薔薇の香を纏へる人とすれちがひ

槐集

高橋将夫選

星を恋ふ螢もありぬ水の音 大阪 有松 洋子

古池の緋鯉の口よりのどかな詩

万緑や流るる川の底昏し

殉教や青梅あをきまま落ちて

天の愛地の愛青葉若葉かな

どんな日もすべて特別聖五月

母の日や恋も知らずに母となる

古墳跡げぢげぢの住む快適さ

ヒマラヤのブルーポピーの嘆きかな

思ひ切りハイタッチして夏に入る

真四角にアイロンかける今朝の夏

夏芝居底の知れたる釣瓶井戸

ハムスター埋めしあたりの茂りかな

麦秋や少し固めの茹で卵

落し文やはり引き返して拾ふ

京都 中林 晴雄

江島 照美

しばらくは静かに睡る植田かな 福井 時澤 藍

無駄足を運びて卵の花腐しかな

まぶしくてうらやましくて柿若葉

一服のシフォンケーキと青葉風

目に青葉宇治川下る櫂さばき

虹色の薔薇に匂ひのなかりけり 摂津 中田 禎子

掌を発つ夏蝶のゆらぎかな

あぢさゐに数多の顔の浮びける

万緑や血潮緑に変わりつつ

言霊に老鶯応ふ高野かな

仏法僧はるかなるもの呼ぶやうに 岡崎 吉田 順子

風に来て風に消さるる夏茜

河骨やふと後ろより声のして

海光の閑けさにある金魚玉

赤蟹の水をはなれて流されず

銀河往来

高橋将夫

◇『槐集』鑑賞

古池の緋鯉の口よりのどかな詩

有松 洋子

緋鯉の口を見て「詩を口ずさんでいる」と詠むあたりが、作者ならではの感性。古池と詩の対比が意味深長。

〈星を恋ふ蛩もありぬ水の音〉と〈殉教や青梅あをきまま落ちて〉と〈万緑や流るる川の底昏し〉の句は、それぞれ蛩と殉教と万緑の本質に迫っている。

思ひ切りハイタツチして夏に入る

江島 照美

「思ひ切りハイタツチして」の動作から、「夏に入る」という季語への流れが実になめらかで、爽快。

〈ヒマラヤのブルーボビーの嘆きかな〉の句の抒情も、〈古墳跡げちげちの住む快適さ〉の句の視点も作者ならではのもの。

夏芝居底の知れたる釣瓶井戸

中林 晴夫

釣瓶井戸は深いといってもたかがしれている。しかし、夏芝居は決してそうではないと、あえて曲解しておこう。

〈落し文やはり引き返して拾ふ〉の句からは、作者の心の機微が伝わってくる。

しばらくは静かに眠る植田かな

時澤 藍

代田が植田に変わり、やがて稲田から刈田、稽田と推移する。田植が終わったばかりの静かな田園風景が目に見え、束の間

の静けさにひたる精神の風景。

〈無駄足を運びて卯の花腐しかな〉、〈まぶしくてうらやましくて柿若葉〉の句からも、作者の心情がよく伝わってくる。

虹色の薔薇に匂ひのなかりけり

中田 禎子

虹色の薔薇に匂ひがないという。何かを得て、何かを失うのは世のならないところか。

仏法僧はるかなるもの呼ぶやうに

吉田 順子

言われてみれば、たしかにそんな気がしてくる。はるかなるものを求める作者の精神の風景。

日も月も青空にあり山法師

阪倉 孝子

昼の月が出て、山法師の花が咲いている景。別に不思議な景ではないが、山法師が幻想的な雰囲気醸し出す。

〈先客は青蛙なり丸木椅子〉と〈補陀落は雲海の果て帆を立てり〉の句、どれにも作者ならではの視点がある。

十戒を置き忘れたる籠枕

中谷 富子

よほど籠枕の使い心地がよかつたのだろう。十戒を置き忘れる程とは恐れ入る。

〈髪切りしこと気付かれず夏に入る〉の句、女性なら誰でも経験したことがありそうだが、「夏に入る」が効いている。

万緑や和紙で繕ふ虚舎那仏

中島 昌子

仏像の修復方法はいろいろあり、和紙を使うのもその一つ。万緑のもので、仏の疵も十分癒されることだろう。

〈以下略〉